

10月1日、新山種美術館を 東京・渋谷区広尾にオープン

山種美術館館長 山崎妙子氏

「また戻ってきたくなくなる、とっておきの美術館」を目指す

本誌 山種美術館の創立者は山種証券（現SMBCフレンド証券）の創業者であった山崎種二氏ですね。

山崎 はい。当館は私の祖父で山種証券や山種産業などを創設した山崎種二が蒐集した美術品の寄贈により一九六六年に東京・日本橋兜町に日本画専門の美術館として開館しました。その後、一九七六年に私の父で二代目館長であった山崎富治が旧安宅コレクションの速水御舟作品一〇三点を一括して購入するなど収蔵品を増やし、現在では明治から現在まで近現代の日本画を中心に一八〇〇点以上を所蔵しています。なかでも速水御舟の作品はそれまで所蔵していたものと合わせ一一八点になり、国内外で最も優れた御舟コレクションといわれています。また、当館は岩佐又兵衛「官女観菊図」、椿椿山「久能山真景図」、竹内栖鳳「班猫」、速水御舟「炎舞」「名樹散椿」の五点の重要文化財や酒井抱一「秋草鶉図」など一四点の重要美術品、奥村土牛の「鳴門」「醍醐」をはじめとする院展に出品された代表作群、そして横山

大観「作右衛門の家」、上村松園「砧」、小林古径「清姫」、村上華岳「裸婦図」なども所蔵しています。

国内外で最も優れた御舟コレクション

本誌 山崎種二氏は城山三郎氏の小説のモデルにもなった立志伝中の相場師といわれた人ですが。

山崎 山崎種二はビジネスにとっても厳しい人だったといわれていますが、一方で横山大観や川合玉堂、上村松園、小林古径、奥村土牛など多くの画家と親交、支援していました。また、私にとっても優しい祖父で、一歳の時から祖父と一緒に暮らしていました。四季折々に替えられる速水御舟など床の間の掛け軸を祖父に抱っこされて見ていた記憶があります。

本誌 幼少時から美術に興味を持っていたのですか。

山崎 小中学生の頃には油絵を習うなど美術は大好きでしたが、美術関連の職業に就くことは考えていませんでした。大学も経済学部に進学

し、卒業後は金融分野に就職するつもりでしたが、在学中に美術への興味が大きくなり、二浪して東京藝術大学大学院の美術研究科に進み、速水御舟の研究で博士号を取得しました。当時の平山郁夫学長に「絵描きの心が分かる美術館長になって欲しい」といわれたことは、大変な励みとなりました。藝大で美術史だけでなく模写や日本画の実技も学んだことで、画家の気持ちが多少分かるようになった気がします。

本誌 日本橋兜町から東京・千代田区三番町に移転しましたが。

山崎 日本橋兜町の建物や設備の老朽化に伴い、一九九八年に千鳥ヶ淵に隣接した三番町KSビルに移転しました。当初は場所が新しくなったことから来館者が減りましたが、展示の切り口の工夫、照明の変更、広報の努力などにより、徐々に来館者が増加し、二〇〇五年に一〇万人を突破、二〇〇七年には兜町時代を超える年間一五万七〇〇〇人を記録しています。

本誌 現在、新美術館を東京・渋谷



谷に建設していますね。

山崎 三番町の美術館はこの五月二三日から七月二六日まで開催する「上村松園／美人画の粹」をもって休館し、今年一〇月一日にオープンする新美術館の開設準備に入ります。新美術館はJR山手線恵比寿駅近くの渋谷区広尾に新築している六階建てビル（ワイマツツ広尾）の一階と地下一階を専有、一階にエントランスとミュージアムカフェ、地下一階に展示室とミュージアムショップが設けられます。新美術館のデザインは日本全国的美術館を回り、私達の

感性に合う設計を行っていた日本設計に依頼、展示室内には企画展示室と当館の主要作品がいつでも鑑賞できる常設展示室を設置します。企画展示室と常設展示室を合わせた展示スペースは現在の約二倍、兜町時代とはほぼ同じ広さの七〇〇平方メートルになります。また、企画展示室は当館所蔵の大型作品もゆったりと展示できる天井高の空間に、自由にレイアウトできる可動壁を使って、展示会に合わせた理想的な展示環境を実現できるようにします。さらにLEDを使った最新照明設備を完備

し、作品を照らす光源が鑑賞の妨げにならないよう、器具の形や種類、設置の角度にも細心の注意を払って設計をしています。このほか、地下一階の展示室への階段脇の壁面（ロビー入口正面）には加山又造の陶板壁画作品「千羽鶴」を設置します。

本誌 新美術館のコンセプトは、「いま、還る場所」〜また戻ってきたくなる、とっておきの美術館〜ですが、

山崎 新美術館は「美術を通じて社会、特に文化のために貢献する」という理念を継承しつつ、これまで以上に身近に楽しめる美術館を目指しており、より理想的な展示環境で

老若男女、国内外を問わず、多くの方々に日本画の優品を鑑賞していただきたいと思っています。現在は来館者の約八〇％が五〇代後半以降の女性なので、新美術館ではさらに若い方や外国人を含めて幅広い層に来館していただきたいと考えています。情報が溢れる現代には忘れられがちな物事の本質に立ち還り、再び訪れたいと思っただけのような質の高い美術館の提供を目指します。豊かな芸術に触れ、新たな気持ちになり、そしてまた戻ってきたくなる、そんな場所にしたいと考えています。

本誌 新美術館開館記念特別展は「速水御舟〜日本画への挑戦〜」ですね。

山崎 重要文化財の「炎舞」や「名樹散椿」をはじめ、「山科秋」「春昼」「百舌巢」「翠苔緑之」など当美術館所蔵の御舟コレクションに加え、御舟の一九三〇年の渡欧日記や本邦初公開になる未完の大作「婦女群像」などを展示します。常に挑戦者であろうとした御舟の画業の全貌を紹介する展覧会で、同展を通して四〇歳の若さで急逝した御舟が新たに目指していた方向性が明らかになることを期待しています。

山崎妙子（やまざき・たえこ氏）
1984年、慶應義塾大学経済学部卒業。1988年、東京藝術大学大学院美術研究科修士課程終了。1991年、同大学院美術研究科後期博士課程終了。
「速水御舟の研究―伝統と新たな創造の問題を中心として―」の論文で博士号取得。同年、財団法人山種美術財団理事。2006年、山種美術館副館長、2007年、財団法人山種美術財団理事長兼山種美術館館長に就任。